

学校教育目標		心豊かで ねばり強く 正しく たくましく社会を生き抜く生徒を育成する													
a ミッション		小中連携教育の充実による系統的で魅力ある教育の実現				a ビジョン		〇ワクワクする学校 〇成長し続ける学校 〇規律と温もりのある学校				尾道市立吉和中学校			
評価計画						自己評価						学校関係者評価			改善計画
	b 中期経営目標	c 短期経営目標	d 目標達成のための方策	e 評価指標	f 目標値	8月	1月	h 達成度	i 評価	j 結果と課題の説明	k 二次評価			l コメント	m 改善案
						g 達成値	g 達成値				イ	ロ	ハ		
資質・能力の育成	誰一人取り残さない学びの保障をするために、授業改善を進め、生徒の基礎的・基本的な学力の定着と主体的な学びを進める	ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくりを通して、生徒が「分かる」「できた」と感じられ、意欲的・主体的に学習に取り組む態度の育成をはかる。	①環境づくり ・意欲や成長を促す声かけ ・生徒の言動を価値付ける声かけ ②人間関係づくり ・考えの交流・共有の場の設定 ③授業づくり ・ねらいの明確化と流れの可視化 ・学ぶ必然性のある課題設定 ・生徒の実態に合わせた主体性を引き出す工夫	①②③生徒アンケート 「授業では、挑戦と失敗を繰り返しながら、問いや課題の解決に取り組んでいる。」の項目のスコア平均値（5段階）	3.0	3.9	4.1	136.7%	A	全ての教科でユニバーサルデザインを視点とした授業改善に取り組むことができた。ユニバーサルデザインを視点とした授業実践交流の共有や小中連携を行うことで、より生徒の実態に即した授業の工夫を考えることができた。教員間で困り感やよかった取組み等、日々共有する風土ができた。また、アンケートによると、「授業に取り組みやすくなった」、「今やるべきことがはっきりとわかっている」の肯定的回答がともに96.6%あることから、ユニバーサルデザインの視点を取り入れることは生徒にとって「わかりやすい授業」につながっているものがある」の肯定的回答84.3%、「話し合いをしたり発表をしだしたりしやすい雰囲気はある」の肯定的回答87.6%であることから、興味のある課題設定や話し合いの雰囲気づくりに課題があることがわかる。また、「挑戦と失敗を楽しんでいる」の肯定的回答は5段階中3.6であり、「失敗と挑戦」を楽しんで取り組むにまで至っていない。	9			一歩、一歩が大事で、基本の習得が重要だと思う。生徒の実態に即した授業の工夫、小中学校との連携等が評価できる。小中学校で中学校の教員に度々出会える。このことが、学力の定着や主体的な学びにつながる。ユニバーサルデザインを視点とした授業は、生徒にとって分かりやすい授業になっていると思うが、その先を考える力がつくことが必要である。教員間で情報共有できる風土が出来たことは良い。	ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業の取組を再度整理し、より多くの実践を共有し、自身に取り入れていけるように「吉和モデル」の作成し、研究の深化・向上をする。さらに、「興味のある課題づくり」に着目した実践を集めたり、どのような時に生徒が興味・関心を示したかを分析したりしながら、授業改善を進める。課題への取組過程、失敗の生かし方や失敗することの意義を評価するなど、学習意欲を引き出し、持続させる手立てに着目した授業改善にも引き続き取り組む。特別活動を中心とした話し合い活動において、小中学校とのつながりを踏まえて改善していく必要がある。
		家庭学習の習慣化と、個別最適な学びや協働的な学びを進め、基礎的な知識・技能を定着させる。	①基礎基本の徹底を目的とした「がんばり」学習の充実 ②「がんばり」と連動した小テストの実施 ③生徒の実態分析に基づく協働的な学びの工夫	①②小テストの平均通過率 ③生徒アンケート「授業では、自分が必要な時に、必要な仲間と協力しながら学んでいる」のスコア平均値（5段階）	80%	3.0	①②64.8% ③4.2	①②68.0% ③4.3	①②85.0% ③143.3%	B	生徒アンケートによると、「がんばり」が予習や復習に役立つと感じている生徒が82.6%おり、「がんばり」を実施することで授業理解度の確認や基本的な知識の定着を図ることができた。しかし、課題をやりきることができなかったり遅れたりする生徒の固定化に課題がある。また、小テストの平均通過率はほとんどの教科で目標値を下回っており、学習の取り組み方への指導や生徒実態の分析を細やかに行う必要がある。生徒の必要感に応じた補充学習や自習教室の実施の継続ができた。また、実施時には生徒からの質問等も増えたり、教え合いをしだりするなど、学習への取組姿勢が意欲的になった。必要な仲間と協力しながら学ぶ姿勢を「できるまでやりきる」意欲につなげていく必要がある。	9			基礎学力を復習する事が、成長につながる。共働きの家庭が増え、子どもとの交流の時間が減少している。小学校の寺子屋倶楽部のような取組ができないかと思う。基礎基本が身についていない生徒が多い中、補充学習の実施で、仲間と協力しながら学習意欲が向上したのは素晴らしい。がんばりができない生徒の固定化にも、家庭環境が影響している。不登校の問題は、家庭にあると思われ、学校と地域の協力が必要だと思う。仲間と協力しながら学んでいるという回答が多く評価できる。
生徒指導の充実	生徒の主体的な絆づくりを推進し、積極的な生徒指導を進め、安全・安心な温かい人間関係を構築し、生徒の「本気」を引き出し、豊かな心を育てる	教育相談、道徳教育を充実させ、生徒に寄り添いねばり強く心に響く生徒指導に取り組み、行きたい学校づくりを進める。	①学年担当・生徒指導主事・教育相談コーディネーターで細かな情報共有 ②月1回の生徒アンケートの実施 ③生徒が主体となる話し合いや協働的な活動を通じて成功体験や達成感を感じられる機会を増やす。	①②不登校傾向・不登校生徒数 ③生徒アンケート「学校へ行くのは楽しい」の項目 肯定的評価	前年度－5人 90%	7月現在 前年度－3人 80.7%	1月現在 前年度－4人 81.5%	①125% ③90.6%	A	不登校生徒に継続的な家庭訪問と保護者連携を行った。また、全員面談やSC面談、生活アンケート、SWとの連携などを実施して未然防止に努めた。学校へ行くのが楽しいと感じていない生徒は第2学年で多く63.9%となっている。不登校生徒が少ない学年ではあるが、生徒一人一人に課題や背景がそれぞれあることを理解したり、リーダーを育成したりする必要がある。第1学年の肯定的評価や90.9%だが、実際には女子同士で人間関係を築くことに課題があり、仲の良い人同士で集まっていなくて不安でできない特徴がある。	9			不登校生徒への取組として、生徒との交流や学校の楽しさを見てもらってはどうか。学校あげて全職員で連携、協力が不登校生徒の減少につながっている。その熱意が、生徒の主体性につながっている。不登校の問題は、家庭にもあると思われ、学校と地域で協力する必要がある。粘り強く家庭訪問を行っており、一人でも不登校生徒が減ることを期待する。	全ての生徒が不登校になるかもしれないという危機感を持ち、小さな変化に気がつける感度の育成と教育相談体制の充実を図る。特に、生徒の行動の背景を理解するために、教職員間での連携や相談を密に行う。ソーシャルスキルトレーニングや道徳教育、日々のHRを活用して、人との関わり方を見つめ直す機会を設け、集団づくりに取り組み、集団の質の向上に努める。
		学校行事や生徒会活動など体験学習（特別活動）を充実させ、生徒の「本気」を引き出し自己指導能力を育成するために、集団づくりを進める。	①生徒が自分たちで考え、全校生徒がよりよい学校作りに携わることができる行事計画や生徒会活動を行う。 ②生徒の意見を取り入れ、生徒主体の学校づくりを行い、本気を引き出す。	①②生徒評価による「学校行事に本気で取り組んでいます。」の項目 肯定的評価	95%	96.4%	92.4%	97.3%	B	生徒会活動では、学校の校則に関するビデオを作成したり、校内の課題を解決するためのポスターを作成したりすることで、自分達で学校をよりよくしていく姿勢が身に付いた。それを経験した生徒会執行部の生徒が、自分達で委員会の新たな活動を提案する風土が醸成された。旧生徒会執行部が育成した風土を新生徒会執行部が引き継ぎ、吉和中学校の伝統にしてい必要がある。特別活動では、班の話し合いのルールを自分達で決めて、行事や太鼓の目標を考える取組を行った。タイミングを逃さず、目標を共有したり、ルールを再検討したりすることで、安心安全な風土を醸成する必要がある。	9			文化祭のビデオ作製を生徒に任せたことを引き続き継続してほしい。文化祭のプロモーションビデオ、体育祭にしても、生徒自らの発案が十分に発揮され見事である。生徒会活動が活発なのは良いが、一部の生徒だけで、全体を巻き込むことが難しいと考える。新生徒会の活躍に期待する。	旧生徒会役員が育成した、「自分達で学校をよりよくしていく」という風土を新生徒会が引き継ぎ、発展させることができるよう、計画的に取組に挑戦させ、学校生活における自治する姿勢の必要性を感じさせることで、生徒の自主性を育成する。班やクラスでのルールを自分達で決める機会を増やし、みんなが安心安全に、学校生活を送れるようにする。そのために、班長会や委員会の活動を通して、生徒の意見を集約し、よりよくしていく活動を考える。これを学習集団づくりに生かす。
吉中太鼓	生徒同士、保護者や地域、教職員と響き合う	吉中太鼓で地域や学校、自分に誇りを持たせ、日常生活や将来に繋がる心を育てるとともに、感謝の気持ちを行動で表現できる生徒を育成する。	①太鼓取組の中で、礼儀作法や吉中太鼓の歴史や伝統を継承させることの重要性を理解させる。 ②自分たちで課題を解決する場面を設定することで、生徒の主体性や人前で堂々と自己を表現する力を身に付けさせる。	①②生徒評価による「行事やイベントで太鼓を披露したいですか。」の項目 肯定的評価	90%	1年72.7% 2年70.0% 3年83.9% 全体75.9%	1年90.9% 2年61.1% 3年90.6% 全体81.5%	90.6%	B	3学年は、青少年健全育成大会の発表に向けた取組を行う中で、仲間のために全力を尽くしたいと感じる生徒が増加し、苦手な生徒も自分なりの本気で本番の演奏に臨むことができた。2学年は、太鼓に対するモチベーションの差が大きく、大きな声を出すなど目立つ行動をするに抵抗感がある生徒が多かった。ただ、太鼓の授業を楽しむにしている生徒も多い。1学年は、上手に打てる生徒が多く、男子の声が特に大きい。女子は周りの人を気にしている状況もあるので、全員で声を出すことを意識した指導が必要である。全学年とも「太鼓は頑張る」というダブルスタンダードにならないように留意しながら指導を行う。	9			吉中太鼓の取組が、生徒の成長につながり、地域からの評価につながっている。3年生は「見てもらっている」という満足感と自信が肯定的評価を高めている。学年で、太鼓に対する熱量に差があることは仕方がない。先輩の格好良い姿を見せていく必要がある。バチ受け渡し式で、恥ずかしがる生徒がいたが、3年生のように、自信をもって行動できるように成長してほしい。	3学年は、太鼓で身に付けた本気で取り組む姿勢を、受検や残りの学校生活においても発揮できるよう伝え続ける必要がある。2年生は、バチ受け渡し式で吉和の伝統や本気で取り組む姿勢を3年生から引き継ぎ、自分達が吉和中学校の中心になっていくことを意識させた指導をする。1学年は、周りに合わせる特徴を良い方向に伸ばしていけるよう、頑張れる生徒を個別に声かけをして増やしていくことで集団としての成長を目指す。太鼓で付けた力を他の教育活動へ意識して生かすように取り組む。
働き方改革	職員のワークライフバランスが確立している	個業とならないよう、チームで動き、職員がお互いに頼みやすい職場づくりを進めるとともに、長時間労働を解消する。	①日々の情報共有を密にし、学校経営会議、分掌会、学年会等を充実させることを通して、主任主事を中心としてチームで動く。 ②衛生懇話会において、業務改善の具体的方法について議論し、業務改善を推進する。（月1回）	①②市教委実施の働き方改革アンケートの質問項目「教職員間で業務の手助けなど、互いに頼みやすい雰囲気がある」の肯定的評価	昨年度比+5ポイント	昨年度比±0	昨年度比+9.9	115.4%	A	市教委実施の働き方改革アンケートの質問項目において若干の変更があり「私は、教職員間で業務の手助けなど、互いに頼みやすい雰囲気があると感じている」となった。その肯定的評価は、昨年度同期比9.9%上昇した。加配の配置による担当業務の削減、ケース会議の定期的な開催による不登校をはじめとする生徒指導の諸課題への未然防止の取組等が功を奏していると考えられる。しかし、他項目の結果や市内平均と比較によると、管理職等による業務の進捗の把握や現状を踏まえた業務分担の見直しには依然とした課題があり、日々の業務に対する充実感の大幅上昇にはつながっていない。今後も継続した働き方改革の推進が求められる。	9			心身の健康を優先して業務を行ってほしい。部活動や太鼓の披露など校外活動が多く大変だと思うが、職員が一致団結している姿がみえる。アンケートのポイントが上がっていても、日々の充実感がないと働きやすい職場にはならない。昨年度よりも働き方改革が進んでいることが評価できる。	主任主事を中心として各分掌の役割分担の見直しを年度途中でも大胆に実施することで、チームで働く意識の醸成を図る。次年度の行事予定の見直しを全教職員の意見を入れながら実施することで、学校経営への参画意識の向上、日々の業務による充実感の向上につなげていく。属人的な働き方から脱し、組織として働くことで、効率化や効果の増大を図る必要がある。そのために、働き方改革の意義やねらいを再度教職員で確認したり、小さな改善や地道な業務の積み重ねが大きな効果を生むことを教職員で確認しながら働き方改革を推進する必要がある。